

学術情報センター（NACSIS）の
「全国大学図書館収書状況データベース（JBCAT）」
を用いた著書業績の客観的評価法

An Objective Evaluation Method for Japanese Academic Books:

Using the Database JBCAT prepared by NACSIS.

守 一雄・守 秀子

Kazuo MORI & Hideko MORI

1. はじめに

大学改革の一環として、教官の研究業績評価が重要な課題となってきた。教官の研究業績は通常、著書と論文の「数」でなされるが、業績の本来の評価はその「質」こそを基にすべきである。そこで、種々の方法により、研究の質を評価する試みがなされてきているが、どれも問題点を抱えている。被引用件数による評価は最も妥当性が高く、最も有効な方法であると思われるが、アメリカの民間機関が作成したデータベースに頼っており、その作成の歴史からみても自然科学系の雑誌論文が主であるために、著書、特に日本語で出版された著書の評価には適さない。そこで、ここでは、日本語で出版された書籍の評価に適すると思われる新しい評価基準について提案する。

2. 従来の業績評価法の問題点

(1) 量は測れても質が測れない

量とは本来「計測された質」のことである。教官の研究業績評価というのも、各教官の研究業績の高さという「質」を測定して、何らかの「量」に置き換えようとする行為に他ならない。研究業績を測定しようとする際、最も簡便な方法は、著書や論文として発表された研究業績の数、すなわち量、を数えることである。本学部の「教官等の人事に関する内規」でも、第17条2項に、研究業績の評価として「一 著書・論文・報告等の件数は、原則として20件以上を有すること。」という規定がなされている。

しかし、財布の中身を測定するとき、札の額面を考慮せずに札の数だけを数えてもあまり意味がないのと同様に、著書・論文の数だけを数える方法はあまりに素朴すぎる。もちろん、現状の評価方法の問題点は誰にも充分認識されているにちがいない。

それでも、各論文や著書の「額面」を測定する適切な方法がないために、やむを得ず、「札の枚数」だけで近似値を得ているにすぎないのである。

(2) 質を測るためのいろいろな試みとその問題点

論文や著書の質を測るための手だてがまったくなされていないわけではない。以下には、そうした試みの主なものを並べてみることにする。しかし、そのどれもが問題点を抱えており、実質的にはあまり役立っていないのが現状である。

「受賞」による評価

論文の数が1つしかなくとも、その論文が権威ある賞を受賞したものであるならば、その研究者の業績は高く評価されるにちがいない。こうした評価方法は、広く取入れられており、『信州大学教育学部報(平成4年版)』でも「専任教員の教育・研究活動」において、「その他[受賞等]」という欄が設けられている。

「受賞」による評価は、客観性もあり、正当なものであるが、問題点としては、受賞者の数が少ないということである。賞はもらう人が限られているからこそ、価値があるものであり、これは「受賞」による評価法に内在する不可避な問題点であると言える。現に、上述の『学部報』においても、掲載されている103名の教官のうち、「日本中国学会賞」「空気調和・衛生工学会論文賞」「日本鉄鋼協会山岡賞」「日本教育心理学会城戸奨励賞」「日本カウンセリング学会奨励賞」「日本結晶成長学会論文賞」などの受賞者が6名(他に芸術・スポーツの分野での受賞者が7名)いるだけである。複数回受賞しているのは2名しかいない。

「受賞」による評価の第2の問題点は、受賞の数を数えるのでは、結局、著書・論文の数を数えるのと同じになってしまうことである。そこで、各賞の質を測らなければならなくなる。ここでもまた質を測る方法が必要となる。

「科研費などの研究費の受給状況」による評価

『学部報』の「研究活動」の「1 学術研究」という欄では、科学研究費補助金など5種類の研究費の受給状況が掲載されている。(ちなみに、「学術研究」欄の記載事項は、この研究費の受給状況だけである。)研究費の受給には、それぞれの研究領域での厳正な審査にパスしなければならない。そこで、こうした研究費の受給状況は、研究の質の客観的な判断材料の一つになるであろう。さらに、研究費の額まで

も考慮に入れれば、単なる回数だけでない評価も可能となる。研究費が支給される研究領域もほぼ全域に渡っており、それぞれの専門領域ごとに審査がなされるという点でも、公平で客観的な評価と考えられている。（科学研究費の採択率が信州大学全体のもの（25.2%：平成5年度）と教育学部のもの（25.5%：平成元年から5年度までの平均）とがほぼ同程度であることも学問分野別の偏りが少ないことの傍証となるであろう。データは『信州大学学報』472号と『学部報』によった。）

ここでも問題点は、受給者数の少なさである。前述の受賞者ほどではないにしろ、延べで32件と少ない。同じ教官が何度も受給している一方で複数教官で受給する例もあるため、受給を受けている教官の数は31名である。もっとも、以上の数字は『学部報』に記載されている4年間分についてのみであるから、過去に遡ってすべての受給状況を調べてみれば話は違ってくるかも知れない。

もう一つの問題点は、「科研に当たる」というよく使われる表現に表れているように、研究費の受給の有無が必ずしも研究の質を反映していない可能性が大きいことである。（科研費の問題点については、たとえば鈴木(1981)などの指摘がある。）しかし、本稿ではこの問題にはこれ以上触れないこととする。

「審査の有無」による評価

現行の業績審査で最も有効に活用されているのが「審査論文か否か」による論文の質の評価である。前述の本学部「内規」でも、研究業績の質の評価として「二 全国的学会等において発表を行い、その機関誌等に論文・報告等を回を重ねて掲載すること」「三 最近5年間に学会等で審査を経た論文又はこれに準ずる論文等を有すること」という2項が加えられている。細かな難点はあるだろうが、大筋で言ってこの評価は妥当なものであると考えられる。

ただし、同じ「審査論文」でも「学会誌のプレステージ」に応じて評価を変えるべきであるという批判があることも事実である。学会誌のプレステージの測り方については、学会への影響度（次の被引用件数で測る）や採択率、発行部数などいくつかの案がある。やや古い例であるが、Buffardi & Nichols(1981)は、アメリカ心理学関係の雑誌について1論文当りの被引用数、採択率（投稿数に対してどれだけ採択されたか）、発行部数などを調べ、1論文当りの被引用数は発行部数と正の相関がある（影響度の高い雑誌は発行部数も多い）が、採択率とは負の相関がある（影響度の高い雑

誌は採択率が低い) ことを見だし、1論文当りの被引用数に基づいて99の学術雑誌をランク付けしている。

もっとも、こうしたピア・レビュー(同じ研究領域の同僚研究者による審査)システムそのものに対する疑義がないわけではない。たとえば、サイクス(1988)は、Peters & Ceci(1985)の研究を引用して、「論文は公正に判断されるという[ピア・レビュー・システムの]建前はほとんどウソに近い」と述べている。論文審査の際に、隠れた学閥が影響しており、審査委員になることの多い有力なOBが多数いる有名大学の卒業生は審査に有利だというわけである。

「被引用件数」による評価

上記の評価方法の問題点をすべてクリアーし、最も優れた評価方法と見なされているのが「被引用件数」による評価法である。著書よりも論文を高く評価する理系の研究分野では、「被引用件数」で当該論文の価値を評価することがほぼ定着していると言っていていいであろう。

重要な研究であればあるほど、他の研究者から引用される。そこで、被引用件数が多い論文ほど重要な研究であることになる。この考え方は誰でも納得できるものであるが、問題は被引用件数をどうやって調べるかという技術的なところにあった。

しかし、コンピュータの進展に支えられた種々のデータベースの発達によって、この技術的な問題は十数年前に解決されてしまった。アメリカのISI社(Institute for Scientific Information)が発行する『Science Citation Index誌』を使えば、当該論文の被引用件数が調べられる。この雑誌は全世界の自然科学分野の雑誌4,500誌に掲載された論文について、種々の情報をまとめたものであるが、特徴的なのは「被引用件数(当該論文を引用している論文の数)」や「被引用論文(当該論文を引用している論文)の書誌情報」が得られることであった。その後、社会科学分野の雑誌1,500誌(と科学技術・医学分野の雑誌2,400誌の社会科学関連文献)をカバーする『Social Sciences Citation Index誌』と、人文科学分野の雑誌1,300誌(と科学技術・社会科学分野の雑誌5,000誌の人文科学関連文献)をカバーする『Arts & Humanities Citation Index誌』も創刊された。また、これらのすべてがデータベース化され、オンラインでの検索が可能になっている。

このように「被引用件数」による業績評価は現状での最も優れた方法であるが、唯

一の問題点は英語中心であることである。そのため、英文アブストラクトの有無に関わりなく、日本で発行されている人文社会科学系の学術雑誌の多くがカバーされていない。

それでも、英文で論文を書くことが多く、また著書よりも論文を重視する自然科学分野の教官の業績評価は、最終的にはこの「被引用件数」でなされることになっていくだろうと思われる。

(3) 人文社会科学系の書籍の質の評価方法の問題点

人文社会科学系の教官の業績は著書が重視されることが多い。にもかかわらず、その質を評価する具体的な方法はほとんどない。雑誌論文に対しては普通に行われている「審査の有無による質の評価」もなされていない。

広く出版界全体では、書籍の質に対する評価は、「賞」と「売れ行き」という2つの方法によってなされていると考えられる。各種の出版賞が存在し、そうした賞を受賞した著書は高く評価されてしかるべきであろう。しかし、ここでも受賞の希少性のために、日常的な教官の業績評価には適さない。残念ながら、現在の本学部教官にこうした出版賞の受賞者はいない。

「売れ行き（印刷部数）」による評価の問題点

学術書ではあっても、市販される本である以上、「良い本ならば売れる」という原則は成り立つはずである。筆者らも個人的には、本を購入する際に、奥付に記載された増刷回数を参考にすることがある。

しかし、現実には本の売れ行きには本の価格が大きな影響を及ぼし、印刷部数（＝販売部数）と本の質とが必ずしも比例するわけではない。そこで、もし印刷部数を質の指標とするならば、「定価が安い本ほど質が高い」というパラドックスさえ起こりかねない。（黒崎(1993)によれば、「一度でも出版にかかわった人なら分かるでしょうが、本制作費と発行部数との兼ね合いから本の価格が決められているのであって、内容の濃さやレベルの高さに応じて、値段が設定されているのでは決してないのです。基本的には、発行部数の少ない売れない本ほど高価なわけです。」とされる。）

3. JBCATによる業績評価法

価格が高いために一般には売れない本であっても、特定の研究領域において評価が

高い本であれば、研究者が購入するはずである。もちろん研究・教育のための本であっても、本の購入決定に際して価格がある程度の影響をもつことは否めない。しかし、一般の人々が本を購入する際に比べれば、価格よりも内容（＝質）がより重視されることは疑いべくもない。そこで、人文社会科学系の研究者の大半が大学関係者であることを考慮すれば、「大学図書館や研究室に数多く配備されている本ほど質が高い」という考え方が成り立つ。

重要な書籍であればあるほど、他の研究者に購入される。そこで、他の研究者による購入数が多い書籍ほど重要な書籍であることになる。残る問題は研究者による購入数をどうやって調べるかという技術的なものだけである。これは、雑誌論文での「被引用件数」に関して述べたこととまったく同じである。そして、ここでもその技術的な問題を解決したのは、コンピュータ上に構築されたデータベースであった。

本稿で提案する書籍の質の評価方法のエッセンスは、前段落で述べた「重要な書籍であればあるほど、他の研究者に購入される。そこで、他の研究者による購入数が多い書籍ほど重要な書籍である」というものである。ただし、「他の研究者による購入数」の指標として、「大学図書館への収書数」を用いる。さらに、大学図書館への収書数の検索には、学術情報センター作成の「目録所在情報データベース（和図書）」（通称JBCAT）を用いる。

JBCATとは

JBCATは、国立の大学共同利用機関である学術情報センターが作成する、わが国の大学図書館等が所蔵している図書の総合目録データベースである。このデータベースの作成が始まったのは1985年7月で、毎週更新されているが、個々のデータは、このデータベース作成事業に参加する全国の大学図書館等が入力するものであり、その収録期間はまちまちである。平成6年7月16日現在、このデータベース作成事業に参加している大学等の機関数は339である。

JBCATを用いた収書数検索の具体的方法

TELNETあるいはNTSSを用いて、学術情報センターのオンラインデータベースシステム（NACISIS-IR）に接続し、ログオンしてから、呼び出しコマンドJBCATをキーインする。

当該書籍の書名、著者名、出版社名などを手がかりに、当該書籍を検索し、検索結果を出力させれば、NHLD欄に所蔵館室数が表示される。必要であれば、所蔵館室の一覧を表示させることも可能である。(というよりも、該当書籍をどこの大学図書館が所蔵しているかを検索することがこのデータベース利用の本来の目的である。)

```
>>jbcat (データベースJBCATを呼び出す命令)
WELCOME TO NACSIS-IR "JBCAT" DATABASE. (REL. 940801)
COPYRIGHT NATIONAL CENTER FOR SCIENCE INFORMATION SYSTEMS.
THIS DATABASE CONTAINS 2547736 RECORDS.
FOR FURTHER INFORMATION, ENTER ?INFO1 OR ?INFO2 SUBCOMMAND.
  ?INFO1 : EXPLAINS ITEMS DESCRIBING BIBLIOGRAPHIC AND
           HOLDING RECORD.
  ?INFO2 : EXPLAINS ITEMS DESCRIBING AUTHORITY RECORD.

TYPE IN COMMAND
  s 利己的な遺伝子 (『利己的な遺伝子』を捜せ(search)と命令)
*   1   1/ K.利己的遺伝子 (該当するものが1件あった)

TYPE IN COMMAND
  d m.a (表示モード a(m.a)で検索結果を表示(display)せよ)
-----
(           1)
ACCN:000595344 NCID:BN05953441
YEAR:1991
TITL:利己的な遺伝子 / リチャード・ドーキンス [著] ; 日高敏隆 [ほか] 訳
PUBL:東京 : 紀伊国屋書店 , 1991.2
PHYS:548p ; 20cm
VTTL:OR:The selfish gene
VTTL:OR:生物=生存機械論||セイツセイジシキカクイ
PTBL:科学選書||カクケンショ <BN04395857> 9//a
AUTH:Dawkins, Richard, 1941- <DA00775329>
AUTH:日高, 敏隆(1930-)||ヒダカ, トシタカ <DA00137253>
VOL : ISBN:4314005564 PRCE:2800円
NHLD:0190 (ここに収書数が表示される)

TYPE IN COMMAND
  2/ end (JBCAT終了の命令)
END OF NACSIS-IR "JBCAT" DATABASE.
COPYRIGHT NATIONAL CENTER FOR SCIENCE INFORMATION SYSTEMS.
DB-USE CHARGE= 30YEN (以上の検索について30円課金される)
>>
```

図-1 JBCATによる検索例(下線部が入力部分:()内は付加説明)

書名や著者名が確実ならば、接続から表示まですべてを入れても検索には30秒もかからない。また、NACISIS - IR利用のための利用者番号を持っていなくても、信州大学附属図書館教育学部分館をはじめ大学図書館に頼めば誰でも調べることが可能である。利用料金も安く、どんなに長時間利用しても、1回あたり30円しかかからない。

4. JBCATによる業績評価法の妥当性の検討

JBCATによる書籍の質の評価の妥当性について、以下の2つの方法により検証を試みた。評価の定着している図書と心理学関係図書との比較による一般的妥当性の検証、守・守(1992)で紹介された教育心理学教科書による妥当性の検証。

(1) 評価の定着している図書による一般的妥当性の検証

大学図書館への収書数を書籍の質の指標とすることの妥当性を検証するためには、何らかの別の方法によって書籍の質が測られていなければならない。ところが、前述のようにそうした方法がなかなか見あたらないため、妥当性の検証も難しい。それでも、誰の目にも明らかな「質の高い本」も存在する。そして、そうした本が全国の大学図書館に数多く収書されていることが確認できれば、本評価方法の妥当性も確認できたことになるだろう。

評価が高い本の選択

ここでは、誰の目にも明らかな良書として以下の6点を選んだ。Aは、人文社会科学系の本ではないが、著者の一人利根川進はノーベル生理学・医学賞受賞者であり、「受賞による評価」という外的基準との一致を見るために選んだ。Bは科学哲学分野での古典的な本であり、広く人文社会科学系の論文にたびたび引用されてきたもの(の翻訳)である。そこで、「被引用件数による評価」からの良書の代表として選んだ。Cは筆者らの現在の専門領域において最も評価の高い本の一つとして選んだ。Dは、筆者らが今までに読んだ本の中で最も感銘を受けた「一生に1冊の本(守, 1991)」である。これは筆者らの思い出で選んだ。Eは心理学界の指導的立場にいる人ほとんどが関わった日本心理学界の最大の事典である。心理学研究者で所属する大学図書館にこの本を備えていない者はないであろうと考え、心理学関係図書の収書数のいわば「最大値」を知るためにもこの本を選んだ。Fは、同様の意味から、JBCATで

検索した収書数の事実上の「最大値」を知るためのものである。

立花隆・利根川進(1990)『精神と物質』文芸春秋社

T. クーン(1965)『科学革命の構造』(中山茂訳,1971)みすず書房

H. ガードナー(1985)『認知革命』産業図書(佐伯・海保監訳,1987)

R. ドーキンス(1991)『利己的な遺伝子』(日高敏隆ほか訳,1991)紀伊国屋書店

平凡社(1981)『新版・心理学事典』平凡社

新村出(1991)『広辞苑』(第4版)岩波書店

表-1

一般的にみて評価が高い本の収書数調査

書名	大学図書館への収書数(1994.8.1現在)
『精神と物質』	1 3 9
『科学革命の構造』	1 7 2
『認知革命』	1 4 0
『利己的な遺伝子』	1 9 0
『新版・心理学事典』	1 7 5
『広辞苑』(第4版,1991)	3 8 0
心理学関係図書103冊の平均	2 7 . 7 (SD=20.38)

基準となる一般的専門書の選択

一方、これらの評価の高い本が数多く収書されていることを示すためには、比較対照となる一般的な専門書の収書数がわからねばならない。そこで、以下の手順により、一般的な専門書の選択も行った。人文図書目録刊行会編『心理図書総目録1986』に掲載の2,198点から、各ページ右隅に記載の本113点を抽出した。

JBCATでの収書数の調査

上述の6書および心理学関係の113書についてJBCATで収書数を調べた。心理

学関係の113点のうち、JBCATで検索ができなかった10点（これらは 検索の失敗、 収書数なし、の2通りの解釈が可能である）を除く、103点について、その平均と標準偏差を求めた。（表-1、図-2参照）

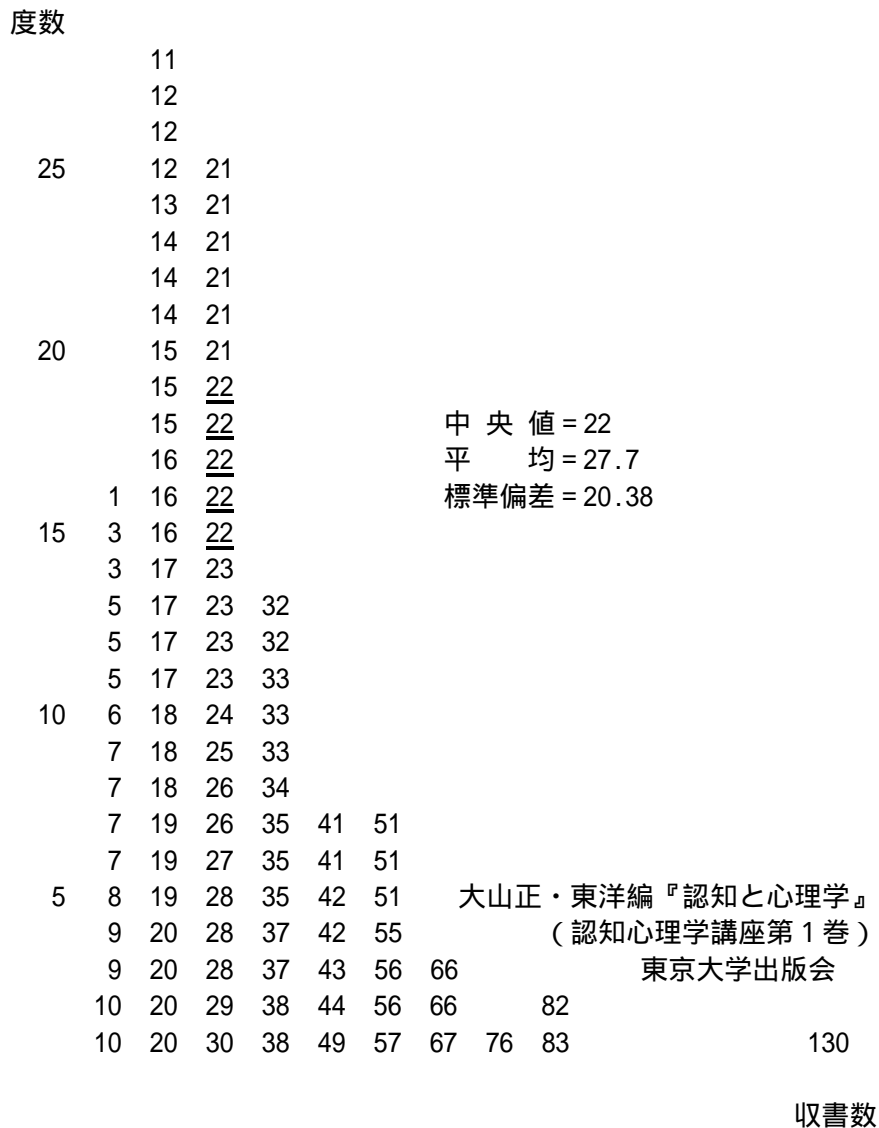


図-2 JBCATによる心理学関係図書103点の収書数とその分布

JBCATでの収書数の検索の結果、一般に評価が高いと思われる4専門書はどれも大学図書館に百冊以上収書されていることがわかった。これはランダムに選び出した心理学関係書籍の平均27.7と比べてみると確実に多いことが分かる。

以上の結果は、「質の高い本ならば、収書数が多い」という仮説を検証するものであるが、反例(=「質が高い本なのに、収書数が少ない」)が存在しないことの証明ではない。また、逆(converse)と裏(converse of contrapositive)が真であるかどうかとも保証されない。ただし、逆や裏の命題を否定するような例(=「収書数が多いにもかかわらず、質が低い」あるいは「質が低いにもかかわらず収書数が多い」)も今のところ見つかっていない。(上述の仮説を別の面から確証する事例である「質の低い本は、収書数が少ない」という例は数多く見いだすことができると思われる。ただし、そうした事例をここに提示することは差し控えた。)

(2) 守・守(1992)で紹介された教育心理学教科書による妥当性の検証

評価の定まっている上記6書を用いた検討により、大きなスケールにおいて、良い本は確かに数多く収書されているということが確認された。そこで、今度はより細かなスケールにおいてもこの評価方法が妥当であるかどうかを調べてみたい。そのためには、ここでも、あらかじめ調査対象となる書籍の評価が何らかの形でなされている必要がある。

筆者ら(守・守,1992)は、教員免許法の改正後に出版された教育心理学の教科書28冊について、その内容を分析し、これら28冊をABCの3ランクにタイプ分けした。この3ランクは、A:教育心理学に大きな進展が見られるにもかかわらず、1960年代で時間が止まっているかのように、従来通りのスタイルを踏襲しているもの、C:新しい教育心理学を展開しているもの、B:上記ACの中間で、古い学習理論と新しい認知理論とが並立されているもの、である。

守・守(1992)では、こうした分類をあくまでも「タイプ分け」しただけであり、どのタイプが良くどのタイプが悪いかの評価を明言したわけではなかった。しかし、言外にはCタイプが最も良く、Aタイプが最も悪いという評価をしたといってもよい。そこで、ここでの評価とJBCATで調べた収書状況との相関を調べることによって、収書数による評価の妥当性を検証することとした。

表-2

守・守(1992)で評価された教育心理学教科書の収書数調査

守・守(1992)による評価		大学図書館への収書数の平均(SD)
Cタイプ(良い) 9冊		40.9 (17.11)
Bタイプ(中間) 9冊		41.9 (15.03)
Aタイプ(悪い) 10冊		25.8 (9.31)
計	28冊	35.8 (16.22)

JBCATによる収書数調査

検索結果は表-2に示すとおりである。タイプごとの収書数について分散分析を行ってみると、タイプによる差が有意($F=3.54$, $df=2,25$, $p<.05$)であり、LSD法による多重比較の結果($LSD=14.08$)、Aタイプの教科書だけが他のタイプに比べ有意に収書数が少ないことが明らかとなった。Aタイプの教科書の収書数の平均25.8は、前述の心理学関係図書103点の収書数の平均である27.7を下回っている。さらには、収書数上位7位までがBCタイプのものであり、上位25%にAタイプの本はまったく入らなかったことになる。

Bタイプの教科書の収書数が多かった理由

守・守(1992)での評価と収書数とは大枠において一致していたが、守・守(1992)で中間的な評価であったBタイプの教科書の収書数がCタイプの教科書と同様に高かったことについて、なんらかの考察が必要であろう。守・守(1992)でAタイプの教科書の評価が低かったのは、その内容の古さが原因である。それに対し、B・Cタイプの教科書はともに新しい内容を含むものであった。ただし、Cタイプの教科書は新しい観点を中心にまとめたものであり、Bタイプの教科書は古い観点到立ちながらも新しい知見も加味したものであった。守・守(1992)では、新しい観点到立ったCタイプを高く評価したが、多くの大学においていまだにBタイプのような授業が行われているのが実状であると思われる。Bタイプの教科書の収書数が多かったのはそうした実

状を反映したためであると考えられる。

多人数著者による本の自書購入による収書数の歪み

教育心理学の教科書もまた心理学関係図書の部分集合であるから、調査に用いられた28冊の収書数の平均35.8は、(1)での103冊の心理学関係図書の収書数の平均27.7とほぼ同じになるはずである。しかし、前者の方が8冊以上も多い。

この理由は、教科書における執筆者の多さである。近年では、専門領域の広がりや個々の研究者の専門化が進み、教科書は専門領域ごとの分担執筆で書かれることが多くなった。そのため、今回の調査に使われた教科書の執筆者数の平均も8.32人に達した。これに対し、心理学関係の一般の本の著者数は通常1人(あるいは2、3人程度)であると思われる。

自分の著書を大学図書館に置こうとすることは自然な行為であることを考慮すると、執筆者数の多い教科書は、その収書数も多くなりがちであることが予想される。そこで、28冊の教科書の収書数の平均から、執筆者数の平均-1を減じてやると、修正収書数の平均は28.5となり、103冊の心理学関係書の収書数の平均とほぼ同じになる。このことは、収書数データの信頼性が高いことの証明でもある。

著者数が常識的な範囲内であり、かつ収書数が数十を越えるような場合には、こうした自書購入による影響は無視できる範囲に納まるであろう。しかし、収書数が10程度と比較的少ない本の場合や、10数名の共著者による分担執筆の本の場合には、その影響はかなり大きなものとなる。そこで、厳密に評価を行おうとするならば、共著者数を考慮に入れる必要があるかも知れない。

(3) JSCATを用いた学会誌の客観的評価

JBCATと同様のデータベースの一つに、「目録所在情報データベース(和雑誌)」(通称JSCAT)がある。JSCATは、JBCATの雑誌版と考えればよい。そこで、JBCATによって調べた本の収書数を本の評価に使うという考え方をそのまま応用すれば、JSCATを用いて学術雑誌の収録数を調べることにより、雑誌の評価もできることになる。前述のように、雑誌論文の評価は、審査の有無による2段階でしかなされてこなかった。そこで、A誌に掲載された論文と、B誌に掲載された論文とは、どちらの雑誌も審査がある限り、どちらも基本的には同じ評価がなさ

れていた。もちろん、非公式には学術雑誌にもランクがあり、ある程度の考慮はなされていると思われる。また、「被引用件数による評価」が定着すれば、雑誌のランクとは無関係に論文そのものの評価がなされるため、雑誌の評価は不要となるにちがいない。そこで、JSCATの利用は、被引用件数による評価ができない領域での当面の評価に利用されるべきものである。表-3は、参考までに心理学関係の学術雑誌16誌についてその収録数を調べたものである。16誌の選択には、日本教育情報学会(1985)に収録の16誌から英文誌3誌を除き、代わりに「発達心理学研究」「基礎心理学研究」「人間性心理学研究」を加えた。収録数によるランクは、ほぼこれら雑誌の一般的評価と一致していると言っていいと思われる。(JSCATに参加している機関数は約700と、JBCATの2倍以上であるため、収録数もJBCATの2倍以上になっている。)

表-3

心理学関係学術雑誌の収録数調査

雑誌名	大学図書館への収録数
『心理学研究』	461
『教育心理学研究』	329
『心理学評論』	295
『年報社会心理学』	212
『実験社会心理学研究』	170
『臨床心理学研究』	148
『犯罪心理学研究』	80
『心理臨床学研究』	65
『家族心理学年報』	65
『動物心理学年報』	48
『行動療法研究』	47
『相談学研究』	43
『基礎心理学研究』	27
『応用心理学研究』	27
『発達心理学研究』	14
『人間性心理学研究』	12

5. JBCATによる業績評価法の評価：まとめ

最後に、JBCATによる業績評価法そのものの評価を行ってみよう。村上(1993)によれば、「よいテストとは、妥当性、信頼性、効率性が高いものである」という。ここでは、心理学で用いられる心理テストについて述べているが、教官の業績評価も広い意味での心理学的測定であり、村上の挙げた3つの条件は、業績評価法の評価にも適用できる。これら3つの基準のうち、JBCATによる評価方法は、効率性において最も優れている。妥当性についても、上述のように外的基準との間に整合性が見られた。信頼性については、特に検討しなかったが、データベース化されたものであるため、その信頼性は極めて高い。

ただし、情報は毎週更新されるために、本稿作成時に調べたデータは、後の時点で調べなおしてみると当然変化している。しかし、このことはあくまでも最新の情報が獲られるという利点であって、信頼性が低いということの意味するわけではない。データが変化しても、評価対象の評価結果がより正確になるのであって、評価結果が歪むことはありえない。

それゆえ、村上の掲げる3つの基準すべてについて、本評価方法は優れたものであると言える。ただし、以下の2点について留意する必要がある。その一つは、教育心理学の教科書28冊の収書数調べにおいて明らかとなった「多人数著者による本の自書購入による歪み」の存在である。厳密に評価を行おうとするならば、JBCATで調べた収書数から共著者数を減じる必要がある。

もう一つは、「新刊書と発行年の古い本での収書数の過小評価」の問題である。JBCATの基礎データが、各大学図書館での入力によるものであるため、新刊書はその刊行後1年程度を経過しないと、評価が難しい。しかし、これは業績評価において不可避なものである。どのような論文や著書でも、評価が定着するまでには一定の期間が必要となる。一方、新しく収書された本がすぐに入力されるのに対し、既に収書されている本は遡及入力されねばならない。遡及入力は遅れがちであり、そのため、発行年の古い本のみかけの収書数は少なくなりがちである。そこで、新しい本に比べ、1970年代以前に出版された古い本は、不当に低い評価が与えられる危険性がある。しかし、この問題点はいずれ遡及入力が完了すれば解消されるはずである。

引用文献

Buffardi, L.C. & Nichols, J.A. (1981) Citation Impact, Acceptance Rate, and APA Journals. *American Psychologist*, Nov.1981, 1453-1456.

人文図書目録刊行会(1986)『心理図書総目録』人文図書目録刊行会

黒崎政男(1993)『哲学者クロサキのMS - DOSは思考の道具だ』アスキー出版局

守秀子・守一雄(1992)「新免許法後の教育心理学教科書の分析」『信州大学教育学部紀要』第75号75-80

守一雄(1991)『DOHC月報』第4巻第9号

村上宣寛(1993)『最新コンピュータ診断性格テスト：こころは測れるのか』日刊工業新聞社

日本教育情報学会(1985)『心理学関係研究誌文献目録1945-1983』日本教育新聞社出版局

Peters, D. & Ceci, S. (1985) Peer Review Practices of Psychological Journals: The Fate of Published Articles, Submitted Again.

The Behavioral and Brain Sciences,

信州大学自己点検・評価運営委員会(1994)『信州大学の現状と課題』信州大学

信州大学教育学部研究情報委員会(1992)『信州大学教育学部報』信州大学教育学部

鈴木真一(1981)「ああ、世も末か日本の大学」『諸君!』1981年1月号 146-160

サイクス, C.J. (1988)『大学教授調書』(長沢光男訳、1993)化学同人